生活科 指導改善のポイント
～気付きの質を高める①～

学習指導要領の趣旨を踏まえ、生活科の指導改善を図っていくにはどのようなことが大切か、そのポイントをおさえていきます。

生活科の授業では、どのようなことを大切にして指導したらよいのですか？

生活科は、児童が充実した活動や体験をするとともに、そのことで生まれる気付きが大切です。
この気付きが質的に高まることによって、活動や体験が一層充実したものになります。
以下の点に留意して、「気付きの質を高める」指導を充実させていきましょう。

１　振り返りの活動として言葉などによる表現活動を大切にする

これまでの生活科の学習の課題として、学習活動が体験だけで終わり、活動や体験を通して得られた気付きを質的に高める指導が十分に行われていないという指摘がありました。

活動や体験したことを言葉などによって振り返らせることで、無自覚だった気付きが児童の中で明確になったり、それぞれの児童の気付きを共有し関連付けたりすることができます。

活動の振り返りにおいて、以下のような児童の気付きを引き出していきましょう。

（例）「うごくうごくわたしのおもちゃ」第２学年
内容（６）自然や物を使った遊び
（教科書「新編 新しい生活 下」東京書籍　Ｐ５０、５１）

○　どうしたらもっとうまく動くか考え、つくり方を工夫（改良）する活動を行った後に･･･

【とことこカメ】

Ｔ：　どうしたらこんなによく動くようになったのですか。

Ｃ：　よく動く友達の「とことこカメ」とどこが違うか比べてみたら、友達は輪ゴムを２本にしていました。２本の方が元気に動くよと教えてくれたので、ぼくも２本にしてみました。すごく元気に動くようになってびっくりしました。

Ｔ：　すごい発見だね。輪ゴムを２本にすると進む力が強くなるんだね。

本事例では、ともすると「動くおもちゃをつくる」という活動の方に教師及び児童の意識が向いてしまい、児童の気付きを引き出すことがおろ

そかになりがちです。
　内容（６）に示されている「その面白さや自然の不思議さに気付く」という指導事項を欠かすことのないように留意してください。
　なお、ゴムの働きについては、３年理科の学習につながるものです。

＜参考＞　３年理科　Ａ物質・エネルギー（２）風やゴムの働き
イ　ゴムの力で動く物をつくり，ゴムを引っぱったり，ねじったりしたときの物の動く様子を比較しながら，ゴムの元に戻ろうとする力の強さによって物の動く様子に違いがあることを調べ，ゴムの力は物を動かすことができることをとらえられるようにする。
※　ゴムの元に戻ろうとする力の強さによって物の動く様子に違いがあることを調べるに当たっては，ゴムの長さを変えずに，ゴムを二重にすることによって，その強さを変えることが例として示されています。

２　伝え合い交流する場を工夫する

　互いに伝え合い交流する活動は、集団としての学習を高めるだけでなく、一人一人の気付きを質的に高めていくことにもつながります。
　一人一人の気付きを全体で共有し、みんなで高めていくことを意識して「伝え合い交流する場」を充実させていきましょう。

（例）「じぶんでできるよ」第１学年　内容（２）家庭と生活
（教科書「新編 あたらしいせいかつ 上」東京書籍　Ｐ８４）
○　自分でできることについて実際に家庭で活動を行った後に･･･
Ｔ：　家でどんなことに挑戦しましたか。
Ｃ（Ａ子）：　せんたくたたみとふとんたたみをやりました。
Ｃ（Ｂ男）：　ぼくもふとんたたみに挑戦しました。Ａ子さんは、せんたくたたみも頑張っているなんてすごいな。
Ｃ（Ｃ子）：　わたしの家ではふとんたたみは大人がするけれど、二人のようにわたしもやってみようかな。わたしもお母さんに喜んでもらいたいな。
Ｔ：　自分でできることをしっかり伝え合うことができましたね。

　学校訪問で上記のような場面を参観しました。そこでは、友達が行ったことと自分が行ったことの共通点や相違点を挙げながら発表する１年生の姿を見ることができました。担任の先生によると、日頃から意識して指導しているとのこと。
　自分が行ったことをカード等にそれぞれまとめて終わりとするだけでなく、伝え合い交流する場を工夫することで、気付きの質が高まります。

「気付きの質を高める」指導の充実に当たっては、上記の２点に加え、「試行錯誤や繰り返す活動を設定する」ことや「児童の多様性を生かす」ことも大切です。
次号で引き続き取り上げたいと思います。